函
棚

文學博士 常盤大定
工學博士 關野貞 共著

支那佛教史蹟評解 一

佛教史蹟研究會

089
9-1-2

孰興圭峯在爲甚大慈悲不捨周旋以引以翼恐迷恐顚直」示心宗傍羅義筌廣收遠取無弁無捐金湯魔城株杌情田銷竭芟伐大道坦然功高覺場會盛法筵不染而住淤泥青蓮性無去來運有推遷順世而歎衆生可憐風號」晩野□□夜□□□面去溺者誰前巖崖荆榛阻絶危險輕錫而過踏者誰肩不有極慈孰能後先

吾師何處復建橋船法指一靈徒餘三千無負法恩永以皐皐□□□□□□□府兼右街功德使驃騎大將軍行內侍省內謁者監□□□□□□食邑三千戶王元宥施碑石大中七年正月十五日兼　奏請塔額謚號當日下闕

大中九年十月十三日建　鐫玉冊官邵建初刻字

百塔寺

（圖版第五十八、至第六十一）

百塔寺は西安府城の南五十里の梗梓谷口にあり。終南山の北麓にして、隋代には鵄鳴埠といひ、こに屍陀林あり。林中に隋の信行禪師の舍利塔院ありしが、唐の貞觀五年に至り、信行の徒僧邕禪師が、遺命して信行塔院の左に葬らしめたるを始として、相次でその左右に窆せるを以て大曆二年（西暦七六七）或は六年（西暦七七一）此名を得たり。張芳碑言によれば、其地は唐相裴休の所施なり。宋の「長

安志」には、大平興國三年に至り、興教院の名を附せられたりといふ。百塔の中には、僧邕禪師の塔の外に、顯慶二年の光明寺大德慧了法師塔、化度寺僧海禪師塔、總章元年の道安禪師塔、開元四年の淨域寺法藏禪師塔等あり。是等はいづれも三階教を信じて之を行じ、時代の燈明たり、心柱たりし人なり。僧邕、道安、法藏の塔銘は、王昶の「金石萃編」の中に採錄せらる。

明の萬曆年代に、この地に遊べる趙崡の「訪古遊記」三首（「石墨鐫華」卷七附錄）の中、遊城南記に據れば、寺は香積寺の東南十里なる實際寺の更に東兩五里にあり。普光寺を西に距る十五里、草堂寺を東に距る五十里なり。趙崡は寺に就きていふ。

本信行禪師塔院、山畔唐裴行儉妻庫狄氏葬塔尙存、餘小塔記所謂纍々相比謂之百塔者、今止存三五而已、殿前石幢經無可書殊絕、寺亦入秦邸、故莊嚴稍勝、殿壁金元舊畫、雄偉可觀

子函の往訪せるものが、古の信行塔院なりし事、疑ふの餘地なし。其後幾多の星霜を經たるを以て現時にありては、頗る荒廢して、僅かに一小僧房を存し、佛殿は壞圮して、左右の側壁崩れながら纔かに立つのみ。寺の境外に五層小塼塔あり。其他多くの塔婆悉く烏有に歸し、殘石の處々に散在せるを見るのみ。今其重要なる者を左に擧ぐ。

（一）五層塼塔—平面方形にして、塼を以て築く。各層次第に其大さと高さとを遞減し、頂に銅寶珠を上ぐ。全體の權衡は佳なれども、軒は重厚に過ぐ。高さ約六十尺あり。其建立の年代明かならず。其樣式を見るに、宋元を上る者にはあらざるべし。（圖版第五十八）

（二）尊勝陀羅尼經幢—二基あり。其一は前掲遊城南記に記さるる大和五年（西暦八三二）无可書の經幢に

present, decayed condition of Pa-t'a ss

して、舊佛殿の前にあり。下徑一尺二寸四分、上徑一尺六分五厘、高五尺七分五厘あり。常途の如く佛頂尊勝陀羅尼を刻す。其後に內供奉僧叡川の加へたる銘文を見れば、この幢は、行律比丘尼願證が三階敎の法嗣たる事、疑ふの餘地なく、從つて比丘尼願證もまた三階敎を奉ぜるものたるを推知すべし。幢後銘は左の如し。(圖版第五十八(2))

佛頂尊勝陀羅尼經　白閣僧无可書

幢後銘

內供奉僧叡川文

於戲行律比丘尼願□　三階敎大禪祖茶毗林畔

先大師茶毗所哀慟樹是明幢比丘叡川爲其銘　師姓耿氏諱惣靜年五十四夏卅四大和五年正月廿六長安日縣羣賢里直心寺□滅灰舍利闕是下□□分律舊疏大上研而達底拔臨壇法三階法甚苦習法華等大乘經大小乘戒至是蚤夜無已願證以其　師嘗來學先天寺余　先大師臨壇四分大師下悉熟行道□□乞詞是豈宜□□□□

茫茫歸人前有何向明度總持□□之仗覺者先後師光唯徒先歸本根福唯後敷不爾塔萬甎懿爾幢一石資糧爾師聖地之力而佛昭格

大唐大和六年四月十日建

伯氏尼總寧　門人願證　循定　殷雅　之雅　啓元

(三)大理石水盤　長方形の水盤にして、寺の前面にあり。廣一尺六寸六分五厘、長二尺三寸八分、高一尺四寸六分、口緣厚二寸五分、四面に四神圖を陽刻し、周緣に寶相花文を作る。頗る雄麗なり。今其一面玄武を寫せる部を損せり。其樣式を見るに、恐くは唐末を下らざるべし。(圖版第五十九)

右の外、金の承安辛酉咸寧社居士壽塔殘石、及び石塔身殘石石蓋石座等あり。何れも唐宋間の者なり。

故大信行禪師銘塔碑(圖版第六十)

隋の信行禪師は、三階敎の主唱者なり。後周武帝の廢佛の後を受けて、欝屈せる佛敎が、隋の復敎と共に勃然として蜂起せる中に於て、三階敎は有力なる一派を爲せり。その敎理は、普佛普法を中心とし、敎判なきを以て敎判とし、超脫自由にして、而も實行に於て頗る嚴肅なるものあり。獨善を斥して濟度を先とし、之を行ふに辭を卑くし、己を屈し、以て佛敎界を縱斷するの勢力を張れり。偏見にして聖旨に乖き、穿鑿にして、眞宗に反すとの理由により、開皇二十年に禁斷の厄に遭ひ、開元十三年にまた除去の災に罹れりと雖も、信行を追慕する敎徒少からず、いづれもその塔側に陪葬せらるゝを欲せしが爲に、信行塔院は百塔寺の稱を招くまでに至れり。

此碑、撰文者・筆者の名を記さず、又樹立の年代を載せざるは惜むべし。之を「續高僧傳」第十六の隋京師眞寂寺信行傳に對比するに、種々の點に於て互に發明せしむるものあり。其生地につきては、傳には魏郡とのみ言ふも、碑には魏州衞國と爲す。其著述につきては、傳には對根起行三階集錄、及山

東所制衆事諸法合四十餘卷といひ、碑には對根起行之法三十餘卷、三階佛法四卷といふ。寂年につきて、開皇十四年正月四日といふは一致するも、年齢に於ては一致せず。傳には五十有四とし、碑には五十有五とす。碑に從ふを可とすべし。葬所は一致して、終南山鷄鳴埠とするも、碑はこれに加へて屍陀林といひ、猶「林葬の法に依つて敬んで舍利を收め、塔を屍陀林下に起す。世移り年改まり、身沒し名沈んで、古老訛言に惑ひ、童稚聞見を絶せん。故に其行德を略して之を金石に寄せ、將來の有識をして舍利の玆に在るを知らしむ」と言ふ。碑が三階教禁斷の後、敎徒陪葬の前に建てられたるを證す。傳には「塔を樹て碑を立てゝ、山足に在り、居士逸民河東の裴玄證ありて文を製す」といふ。碑は夫れ玄證の撰文ならんか。

而して又、傳には、京師に化度・光明・慈門・慧日・弘善の五寺を置けるを言ひ、碑には「法師淨名、禪師僧邕、徒衆等三百餘人、禪師を以て善知識と爲し、三業隨逐、二十餘年なり」と言ふ。

又、傳には、六時禮旋し、乞食を業と爲すを言ふのみなるも、碑には生施死施大士有苦行之蹤、內財外財、至人有爲善之跡と言ふ。外財の語には、明に物質的救濟の意味を含ましむ。

此碑文は宋代以後長く湮滅して學者の目に觸れざりしが爲に、金石書の中に收められざりしが、近代に至りて再び世に現はれたり。

故大信行禪師銘塔碑

茫茫佛海壯矣大聖之雄浩浩法池至哉波若之力世□莫盡物性□以無邊淨土穢土之奇蹤一乘三乘之

妙理巍巍巨測蕩蕩難名苞括有無牢籠生□□□□資十聖德被三賢傳授有期住持無隧至如垂芳五濁播跡千年紹佛日而不虧扇玄風而不滅者惟我大師□□□師矣禪師姓王諱信行魏州衞國人也俗世豪宗茂葉於九堰之上釋門貴種槃根於三界之中備之經史之文載之□□之藏盛哉不隧可得詳焉惟禪師荷山岳之靈膺人天之福殖善因於往業託嘉運於今生故能體含至蹤父如來以入道性懷靈□母智慧以歸眞生始沖年志逾成德慈悲被物解行超羣大人見曰一之奇寶珪璋之本質象王入水之操□金石之性然但王不易堅丹無改色鴻鵠遠志則自抱匈襟菩薩大名則生懷懿德一於是披雜華之文起菩提之行咸波崙之志氣慨童子之精誠誓欲洞達十二之文和會百家之說斯則鵬翼未成已有沖一天之勢龍潛勿用不無飛漢之能體事道眞心亡情習既非自善方慕師門遂能獨拔恩愛之纏孤遊信謗之域追未聞於一慧苑訪奇行於禪林身處檀那之門踐有爲而成業志居波若之宅履無相以安心苦行苦而不疲惡名惡而不畏思賢翼一翼慕道虔虔不回譽毀易心豈以存亡改節斯實體和至德性荷玄道優遊經緯之苑歷泰賢智之莚遂能被奧入微出異一端於人情之外尋詮悟旨洞奇理於聖典之中但世遭五濁之鄙時屬千年之下抓塵取喻地出爲倫□□惟常沒之言卓一□□生盲之句於是以法驗人以時言教邪正既別善惡區分信知學不當根甘露以之成毒藥應其□□寶所以名珍愍一茲常倒之流啓茲普眞之路開生盲之眼目殖定死之根機使識賢聖之法門令知凡夫之行處遂於十二部經中撰對根一起行之法三十餘卷又出三階佛法四卷並行之於世斯則理出情外義超文表附骨間而起慮並血字而成章雨甘露於一儉法之辰拔狗賊於斷常之世然智燈於長昏之夜導盲瞽於闕訝之鄙不說而說則聞其未聞不言而言則到其未到超一一乘之體法出三階之相文救邪錯之迷情息譏訕之謗口可謂智慧方便言辭應機優曇可逢斯□難□者也然禪師解一有比聖之能智有如愚之異故能辯四乘之性習驗三世之根

機斷惡於無始之源集善於有生之際於□不識二果棄而」俱甘於己莫知雙寶珍而並偽坐如如之宅處浩浩之年超達愼之林越怨親之境可謂一乘取法聲聞慧而是盲四依驗」人菩薩凡而有眼名超九地響振三鄭行德既分是非斯及哀善人之不遇怨聖道之無時菩薩得□之秋維漢亡身之日」雖欲泣血於荆山之下投軀於矢石之閒咄世界之無常噫人生之難保嗚呼哀哉春秋五十有五以開皇十四年正月四日卒於眞寂寺即以其月七日送柩於雍州終南山鵄鳴埠屍陀林所捨身血肉求無上道生施死施大士有苦行之蹤內」財外財至人有爲善之跡嗚呼哀哉無常力大賢智以之難免有生多累今古所以同然慧日翳於重雲法燈沒於長夜嗟」世間之眼滅痛聖道之梁摧情深癈社之悲志切崩城之哭至如素幡含煙以臨路霜車轉珮以從風遠悲天竺之名僧近」歎王城之貴族於是悽傷朝市留連塗路有識無識如盲失導之哀若見若聞如子亡親之痛悲連地岳怨動京畿善人既」殞吾將安放於是法師淨名禪師僧邕徒衆等三百餘人夙以禪師爲善知識三業隨逐二十餘年俱懷出世之基共結菩」提之友恒欲碎骨於香城之下投身於雪嶺閒生事莫由死將爲禮遂依林葬之法敬收舍利起塔於屍陀林下禪師生」平之日曾遊此處地連山路依然羊子之碑塔枕荒塗埃壒騰嬰之墓唯恐世移年改身沒名沈古老或於訛言童稚絕於」聞見故略其行德寄之金石使將來有識知舍利之在茲焉廼爲銘曰

淵乎佛海　至矣大人　慈悲起行　智慧生身　居迷辯正　處僞能眞　智飛影沒　形亡道新

唐淨域寺法藏禪師塔銘石（圖版第六十一）

西安碑林第二室前庭東廊の壁間にあり。周縁に美なる寶相花文を陽刻せり。嘉慶乙亥年（西暦一八

695 - I - Ching to Loyang
706 → Chien Pu SSU

一五）撰する所の「長安縣志」に、百塔寺にあることを載せたれば、碑林に移せしは其後の事なるべし。塔銘左の如し。

大唐淨域寺故大德法藏師塔銘并序　　京兆府前鄉貢進士田休光撰文

世之業生滅若輪環者則雖塵沙作數草木爲籌了無遺織哉吁不可知者其」惟流浪乎夫木性生火水中有月以凡筌聖從道場而至道場□因及果非前」際而於後際行之於彼得之於此禪師諱法藏緣氏諸葛蘇州吳縣人昔羣雄」角力三方鼎峙獨光有龍吳特其虎瑾之後裔蟬聯姑蘇曾祖譽吳郡太守蘇州刺史秘書監銀青光祿大夫上柱國開國男大父穎隨閩州刺史銀青光祿」大夫父禮　皇唐少府監丞吳會旗裳東南旖旎洗墨而清夷落衣錦而燭」江鄉山海禁錢蓬萊秘府屢遊清貫歷拜寵章禪師即蘇州使君之曾孫少府」監丞之第二子也年甫二六其殆庶幾知微知章克岐克嶷此寺大德欽禪師」廣世界津航人非鑽仰禪師伏膺寂行禮備師資因誦經至永徽中頗以妙年」經業優長奉　勅爲濮王度所謂天孫利益禪門得人禪師自少出家即」與衆生作大善知識道行第一人天殊勝開普門之幽鑰酌慈源之密波由恐」日月居諸天地消息每對天龍八部晝夜六時如救頭然曾未蹔捨非乞之食」不以食以至于頭陀非掃之衣不以衣得之於蘭若禪師自少于老駝騾象馬」莫之聞乘也以爲鎔金爲像非本也裂素抄經是末也欲使賤末貴本背僞歸」眞求諸如來取諸佛性卅二相八十種好衆生對而而不識奈何修假以望眞」且夫萬行之宗衆相之本生善之地修善之境禪師了了見之矣夫鍾鼓在庭」聲出于外如意元年　大聖天后聞禪師解行精敏奉　制請」於東都大福先寺檢校无盡藏長安年又奉　制請檢校化度寺无盡藏其年又奉　制請爲薦福寺大德非

禪師戒固居龍象之首清淨開人倫」之目不然焉使　天文屢降和象相推揚覺路之威儀總禪庭之準的護」珠圓朗智刃雄鳴伏違順之鬼魔碎身心之株杌廢情屬境卑以自居如谷王」之流謙百川委輸若周公之吐哺天下歸心菩薩下人名在衆生之上悲哉三」界卽火宅之所四大將歲時之速既從道來亦從道去遂拂衣掩室脫曷繩牀」惟惚惟慌不驚不怖學以開元二年十二月十九日捨生于寺報齡七十有八」門人若喪考妣乃相謂曰和上云亡吾徒安放乃收血相視仰天椎心卽以其」年十二月廿□日施身于終南山梗梓谷屍陀林由是積以香薪然諸花壘收」其舍利建塔睹波于」禪師塔右自佛般入涅槃于今千五百年矣聖人不見正法」陵夷卽有善華月法師樂見離車菩薩愍茲絕紐並演三階其敎未行咸遭」弑戮有隨信行禪師與在世造舟爲梁大開普敬認惡之宗將藥破病之說撰」成數十餘卷名曰三階集錄禪師靡不探賾索隱鈎深致遠守而勿失作禮奉」行是故弟子將恐頹其風聲乃援諸景行記之于石銘曰　」有若禪人凝稜心不易兮身世澒洞探討眞賾兮寂行沖融渙若氷釋兮軒裳」蟬聯晴暉相射兮弈裏不染乾乾衣錫兮蕭灑諠譁地自虛僻兮玄關洞開亡」珠可索兮吾將斯人兎夫過隙兮魂兮何之聲流道格若使天地長久而可知」卽相與撫質刋之于石兮

開元四年歲次景辰五月景子朔廿七日壬寅建」